退任にあたって

仏教を学ぶ

松本史朗

私は、昨年秋から体調をくずし、今年一月に退任記念講演（最終講義）をすることができなかったので、ここで小文を草して、若干の感想と謝辞を述べさせて頂きたい。（なお、この論集に写真を掲載することは辞退させて頂いた）

私は、一九八二年四月に駒澤大学に奉職し、仏教学部助手となった。以来三八年間は教員として、また一九六九年から四年間は仏教学部の学生として過ごしたので、大袈裟に言えば、私の半生は駒澤大学とともにあったと言えるかもしれない。長年にわたってお世話になった駒澤大学と仏教学部には、ただ感謝の念しかない。

一九八二年に、生涯の恩師である奈良康明先生のご推薦によって仏教学部の助手となったとき、私の仏教研究に大きな影響を与えることになる袴谷憲昭先生は、Wisconsin 大学での在外研究のため、Madison に滞在されていたが、私はすでに学部四年生の時に、奈良先生のお勧めにより、仏教学部助手に着任されたばかりの袴谷先生のゼミに参加し、その謦咳に接していた。そのゼミは *Abhidharmasamuccaya* を梵語・チベット語で読むというものであったが、当時すでに国際的な学者であった袴谷先生の学識には圧倒された。その後、私は東大の大学院に進んだため、直接指導を受ける機会は少なくなったが、私が仏教学部に務めてから一年が経ち、袴谷先生が駒澤に戻られてからは、非常に親しく長時間にわたって繰り返し教えを受けることになった。

また、私は助手時代に高崎直道先生から親しく教えを受けることができた。高崎先生は大学院博士課程では私の指導教授であったが、当時、私は高崎先生の専門である如来蔵思想に興味をもっていなかったため、ゆっくりお話ししたこともなかった。しかし、大学院が終わってから、『法華経』「方便品」を読み、ある種のショックを受けたために、私の関心は中観から大乗経典の方にも向かって行った。そこで、高崎先生の『如来蔵思想の形成』を資料とつき合わせて初めて読み、大きな刺激を受けることになった。

高崎先生は毎週一回、駒澤大学でも講義をされていたので、私は週に一回、先生とお眼にかかりお話しすることができた。その際、『勝鬘経』や『不増不減経』について、高崎先生に質問し議論するのが何よりも楽しみであった。私は、この時ほど先生と親しくお話したことはない。

一九八三年に「『勝鬘経』の一乗思想について」という論文を書いたとき、それを読まれた先生からお電話を頂き、私の記憶に間違いがなければ、dhātu について共同研究でもしないかというお言葉を頂いた。私は高崎先生と共同研究できるほどの学識をもっているとも思えなかったし、先生の方もどれほど真剣に共同研究などと言われたのか分からなかったが、とにかく dhātu に関する私の理解を先生がある程度認めて下さったように感じて、とても嬉しく思ったことを憶えている。また、私は、如来蔵思想の本質は dhātu 説であると考えてはいたが、当時は如来蔵思想に対して、批判的意識はまだそれほど強くもってはいなかったので、高崎先生とも親しく議論することができたのだと思う。私が如来蔵思想を非仏教的なものとして強く批判するようになるのは、更に後のことである。

一九八四年の十二月、年の瀬も押し迫ったある日、私たちは突然、港区芝にある曹洞宗宗務庁に呼び出された。すなわち、袴谷先生や私を含む仏教学部の教員八名が、宗務庁に召集され、曹洞宗教学審議会第二専門部会のメンバーに任命されたのである。この部会の目的は、曹洞宗において差別事象が生じた思想的教理的な根拠とは何か、とりわけ、仏教の業の理論と差別の関係はどのようなものかを解明することであったと思われる。

この部会では、岡部和雄先生を座長として、一九八五年の一月から殆ど毎月のように繰り返し主として駒澤大学で会議が開かれ、メンバーによる真剣な討議がなされたが、その会議を理論的にも心情的にもリードしていたのは、袴谷先生であった。先生は、「差別事象を生み出した思想的背景に関する私見」（『本覚思想批判』大蔵出版、一九八九年、所収）という論文のもとになる原稿を、一九八五年十月二六日に、大阪の部落解放センターで口頭発表されたが、その内容は実に興味深いものであった。というのも、前述の専門部会は、本来、仏教の業の理論が差別を生み出した原因になったのではないかという問題を解明することを課題としていたはずであったが、袴谷論文の趣旨は、単純化して言えば、業の理論ではなく、本覚思想が差別を生み出した原因であったと論じるものだったからである。業の理論は、因果の説とともに、むしろ仏教的な思想として高く評価されていた。

袴谷先生は、前掲の論文で、本覚思想の特質を明らかにするものとして、すでに挙げた私の「『勝鬘経』の一乗思想に

ついて」と山口瑞鳳先生の「チベット学と仏教」（『駒澤大学仏教学部論集』第一五号、一九八四年）という論文を挙げられたが、袴谷先生自身の本覚思想の定義、つまり、本覚思想とは何かについての説明は、私より見れば必ずしも明確なものではなかった。従って、この点について、私は後に批判的に論じることになる。

本覚思想批判という袴谷説に影響を受けた私は、一九八六年六月十四日に東京大学で開かれた日本印度学仏教学会の学術大会で、「如来蔵思想は仏教にあらず」という発表を行った。私が本覚思想ではなく如来蔵思想という語を使用したのは、中国仏教に起源をもつ本覚という言葉では、インド仏教以来の思想の流れを正確に把握することはできないと考えたからである。

この論文で私は、如来蔵思想・仏性思想の思想的構造を、釈尊自身が批判した対象であるウパニシャッドのブラフマン・アートマン論に他ならないと論じ、さらに如来蔵思想は差別思想であると主張した。如来蔵思想は、大乗『涅槃経』の有名な「一切衆生は悉く仏性を有す」という経文に基づいて、一般に平等思想であると考えられてきたが、大乗『涅槃経』には「一闡提を除く」という表現が繰り返されることによっても知られるように、平等思想であるという理解は妥当ではないと、私は考えている。しかし、この問題について、ここで論じることは、差し控えたい。

如来蔵思想を差別思想とする私の主張に対して、高崎先生は、『「大乗起信論」を読む』（岩波セミナーブックス三五、一九九一年）で、

> 空性思想を了義としたツォンカパの後継者たちの支配したチベットの社会に不平等が存在しなかったとは誰も考えるまい。（二一一―二二二頁）

と反論されたが、問題は、すべての社会的不平等ということではなく、生まれながらの差別、そして仏性や法界という一元（dhātu）による差別の固定化、絶対化という点にあるのである。

「如来蔵思想は仏教にあらず」という主張は、学問的には容易に証明できるものではない。如来蔵思想とは何かということがまず問題になるし、それ以上に、仏教とは何かという問題は永久に解決不能とも思われるからである。それにもかかわらず、私はこの主張の妥当性を論証するためにも、今後もさらに仏教を学びたいと思っている。仏教とは何か。この問題を探求することが、私の生涯の課題のようになってしまった。

私が駒澤大学仏教学部に入学してから五一年が経った。約半世紀にわたってお世話になった仏教学部には、心から御礼を申し上げたい。

私は、駒澤大学で仏教を学び、仏教を教えることができた。無上の歓びである。